

氏名	北村稔
学位(専攻分野)	博士(法学)
学位記番号	論法博第121号
学位授与の日付	平成11年9月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	第一次国共合作の研究 ——現代中国を形成した二大勢力の出現——

論文調査委員 (主査) 教授 木村雅昭 教授 伊藤之雄 教授 大嶽秀夫

論文内容の要旨

1911年に勃発した辛亥革命で清朝は崩壊し、北京を首都に共和政体の中華民国が成立する。しかし軍人指導者が台頭して孫文の国民党は政権を追われ、全国を巻き込んだ形で中央政権の争奪戦が発生する。本論文は、この混乱の中でロシア共産党を仲介に成立し、中国を再統一に向かわせた中国国民党と中国共産党の第一回目の政治合作、すなわち第一次国共合作の経緯を、一次資料を詳細に検討することによって分析したものである。

第一次国共合作は三年で破綻したが、絶大な効果を発揮した。ボルシェヴィズムの組織論を中国国民党(以下、国民党)が採用し、中央集権的な党組織と党直属の党軍を創出した結果である。合作により中国共産党員は国民党に加入し、国民党中央部門や第一線ポストに登用された。しかし国民党はボルシェヴィズムの組織論を採用したもののその運動論の核である階級闘争は否定し、過激な労働運動や農民運動の開始には難色を示した。国民党の「民生主義」は階級闘争の発生を社会政策で未然に防ぐ事を眼目としていたのである。こうした状況の中で蒋介石は、党直属の軍勢力を養成して国共間の矛盾を緩和し、合作の有効性を発揮させようと最後まで腐心した。(序章)

列強諸国から敵視されていたロシア共産党にとり、コミンテルン、及びソ連政府を通じての親ソ勢力の中国での育成は重要な外交戦略であった一方、北京での政権争いに敗れ、地方軍閥を糾合して勢力挽回を画策していた国民党は親ソ勢力の有力候補であった。そのかたわらで1921年にコミンテルンから派遣されたマーリングが中国共産党(以下、共産党)を結成させ、国民党と共産党の合作を推進する。そしてこの計画にソ連政府が加わり、国民党への資金援助が約束される事によって、国共合作の動きは一挙に加速されることとなった。1923年8月に蒋介石が赤軍の視察にソ連へ赴き、10月にはロシア共産党からボロジンが国民党顧問に派遣され、孫文との際どい交渉を通じ種々の矛盾を抑え込む形で国共合作の最終協議が進行した。その結果1924年1月に国民党の根拠地広東省の広州で国民党第一次全国代表大会が開催され、国家再統一を実現する国民革命を目標に掲げる第一次国共合作が成立した。(第1章)

広州では23年3月に、孫文を大元帥とした、地方軍閥の集合体の大元帥府が組織されていた。しかし軍閥は住民を収奪し、商人の自衛組織である商団との間に武力衝突が発生する。農村では共産党員が指導する農民運動が孫文とボロジンとの妥協により開始されたが、地主と小作人との階級闘争に発展し、国民党員の反発を引き起こす。また広東省東部と南西部には大元帥府に敵対する軍閥が割拠した。こうした中でロシアの軍事顧問の協力下に蒋介石を校長として黄埔軍官学校が開設され、国民革命実現の精神教育と速成軍事教育を施された下級士官が出現し、蒋介石の指揮する党軍が樹立される。そして孫文の死(25年3月)後に大元帥府の最大軍閥が、党軍と他の軍閥との連合軍に粛清された結果、25年7月には新たに国民政府が樹立され、古い党籍を誇る汪精衛が政府主席に選出され、軍を統率する軍事委員会主席にも就任した。(第2章)

ところが国民政府内の軍閥から財源回収を図る廖仲愷(党軍政治委員)の暗殺をきっかけに、軍人不満分子の粛清が進展し、蒋介石の党軍を第一軍に、他の部隊を第二軍とする国民革命軍が結成され、25年12月には広東全省が統一された。一方、階級闘争の是非をめぐる国共の理論闘争が激化し、蒋介石は対立解消に努力するが、孫文と廖仲愷の後ろ盾がなく孤立する。加えて共産党員とロシア首席軍事顧問キサンカに支持された汪精衛が、北伐の即時開始を主張する蒋介石と対立する。

蒋介石は共産党員の反乱計画を口実に26年3月20日に第一軍を動員して広州に戒厳令をしき(中山艦事件)、その圧力を借りて汪精衛を排除したが、ソ連との連携のもとに国共合作を継続するために極端な反共派も排斥した。キサンカは召還され、26年5月に蒋介石は孫文の死後空席であった国民党中央執行委員会主席に期限付で就き、軍事委員会主席にも就任した。(第3章)

27年7月、蒋介石は政治と軍事の全てを指揮する国民革命軍総司令として北伐に出発し、新任のロシア首席軍事顧問ブリュッヘルが作戦指導に当たった。しかし国民党員と共産党員との間に蒋介石独裁への不満が高まり、汪精衛の復帰が画策される。蒋介石は共産党中央やスターリンに働きかけて巧みに権力維持を図るが、国民革命軍第八軍の唐生智を後ろ盾に武漢が反蔣活動の中心となり、蒋介石の司令部のある南昌との間で争いが勃発する。26年1月には武漢国民政府が集団指導体制下にスタートし、27年3月に武漢で開催された国民党中央執行委員会拡大会議で蒋介石は中央執行委員会主席を辞任し、国民軍総司令の権限も縮小された。(第4章)

蒋介石は上海へと進軍した。これに呼応して、上海を支配する軍閥に対する武装蜂起が共産党員と国民党員の協力で計画される。二度の失敗の後、27年3月に、共産党員によって組織された労働者部隊と秘密結社(青幫)による武装蜂起が敢行され、民族資本家の協力も取り付けて、共産党主導の上海市政府の成立を図った。一連の動きは武漢国民政府に支持されたが、蒋介石は、青幫と共産党とを切り離し、そして4月12日に青幫に労働者部隊を襲撃させ、自らは衝突仲裁に名を借りて麾下の軍隊に労働者の武装解除を行わせた。いわゆる上海クーデタである。もっとも蒋介石は最後まで共産党との合作に期待をつないでいた結果、従来言われてきたような共産党員の即時逮捕や処刑は生じなかった。しかし武漢との亀裂は拡大し、南京に別の国民政府が樹立された。それにもかかわらず蒋介石はソ連政府との友好関係の維持に腐心した。(第5章)

武漢国民政府はボロジンを顧問に汪精衛を首席に据え、蒋介石逮捕令を発して国共合作を継続した。しかし共産党員の指導する労農運動の激化で政権維持の財源は枯渇し、特に農民運動の激化は地主や富農の大量殺害を引き起こし、出身階層を同じくする麾下の軍隊の士官から強い反発を招いた。加えて農民運動の組織母体である農民協会による米の独占的な管理の結果、食糧を確保せんとした軍隊との間に衝突が発生する。武漢国民政府は共産党と協力して労農運動を抑制せんとしたものの、もはや手遅れで、27年8月の南昌での共産党員による反武漢国民政府暴動を機に、合作は崩壊した。(第6章)

本論文によれば、第一次国共合作とは、中国統一のために人材を確保せんとした国民党と、いまだ弱小な勢力しか保持せず、国民党の軍事力を利用しようとした共産党との思惑の所産である。また諸列強が総じて北京の軍閥政府を支持していた中で、広東に援助の手を差し伸べたソ連政府の意向も合作形成に無視し得ぬ役割を演じていた。しかし階級闘争、とくに農民闘争を積極的に推し進めようとした共産党と、政治権力の奪取を第一義的な目標とし、統一権力を梃子に国民統合を達成し、あわせて諸階級の融和を図ろうとした国民党との合作は、所詮同床異夢に終わらざるを得なかった。以後国民党は都市を基盤として権力を固める一方、国民党に追われた共産党は、伝統的に政治支配の手薄な各省の境目の遊民を吸収し、彼らを紅軍へと組織することによって両者の武力対決が再開されることとなったと結んでいる。

論文審査の結果の要旨

本論文は中国現代史上最重要テーマの一つである第一次国共合作について、その形成から崩壊に至るまでの経緯を詳細に跡付けたものである。第一次国共合作に関しては、これまでも多数の研究がなされてきたものの、中国共産党、中国国民党の政治的思惑がからみ、また合作の援助者であったソ連およびコミンテルン内部でスターリン派とトロツキー派とが対中国政策をめぐる論争を展開していたことから、様々に相異なる評価が加えられてきた。

こうした中であって著者は、膨大な資料を収集し、それらを丹念に分析することによって、国共合作という多様な政治潮流が折り重なり、複雑な政治経済利害が交錯する実態を明らかにしようとする。著者によれば、階級闘争の是非をめぐる国民党と共産党とは結局のところ異なる戦略にたっていたものの、軍閥の打倒と中国の統一達成のためにこの「合作」を維持存続させんとして真摯な努力がなされていた。とくに国共間の亀裂を決定的にした上海クーデタに際して、蒋介石がソ連との友好関係維持のために直ちに共産党員の処刑に賛成しなかったことを資料の綿密な検討を通じて明らかにしたことは、従来の通説に修正を迫ると同時に、政略家蒋介石の資質の一面を浮き彫りにするものである。また武漢国民政府崩壊の直接的な原因を、これまで言われてきたような経済政策一般や右派の策謀ではなく、農民運動を組織した農民協会が食糧の独占的管理に乗り出した結果惹起された軍との対立に求めた点も説得的である。けだしこの時代の政治権力の維持存続にとって

軍事力こそが要であったからである。また中山艦事件に関しても、蔣介石の計画説、突発説の双方が当時の記録、その後の研究をふまえて綿密に検討されており、結局のところ前者が正しいとの評価を下している。

本論文の特徴は、資料の綿密な検討によってあくまでも事実を明らかにしようとする点にあるが、同時に中国社会に対する深い理解も随所に示されている。例えば上海クーデタに際して、遊民の秘密結社青幫が決定的な役割を演じていたこと、農民運動に際しても主として遊民の組織からなり、国民党も共産党も眼中にない哥老会が大きな役割を演じていたこと、そしてこの農民運動が共産党のコントロールを脱して暴発し、中国社会に潜むアナキー性を顕わにしつつ、多くの「土豪劣紳」を無差別的に処刑することによって国共分裂の導火線となったこと等の指摘は、中国社会の体質を鋭く衝いたものである。また共産党のみならず国民党もボルシェヴィキの党組織論を受け継いだという指摘も、国民党の「革命的」性格をあらためて想起させるものといえよう。

ただこうした党組織論を共に受け継ぎつつも、その後の両党がたどった軌跡があまりにも違ったことは周知の事実である。それは国民党がボルシェヴィキの組織論を受容しつつも、それと密接不可分な運動論を排除したため、いつしか党組織そのものが変質したことに求められるが、こうした観点からの考察が不十分なように思われる。ただこれは著者の関心が第一次国共合作の成立と挫折の経緯をあくまでも史実によって検証することにあり、そのために新たな「誤解」を生むおそれのある巨視的な検討を意図的に差し控えようとしたことの結果であって、決して本論文の価値を低めるものではない。とくに現代中国史上の重要事件である中山艦事件、上海クーデタ、国共合作の崩壊に関して従来の通説の誤りないし曖昧な点を正したことの意義は大きい。また国民党系の研究者を除き、従来ともすれば軽視されがちであった蔣介石を正當に評価しようとしたことも、特筆されるべきである。軍事優先にたちつつも、中国統一のために共産党との提携を可能なかぎり追求せんとして政略を駆使する有能な軍人指導者と捉える著者の蔣介石像は、それが実証的な資料的裏付けに支えられている故に、今後の近・現代中国研究に貴重な貢献をなすものといえよう。

以上により本論文は、博士（法学）の学位を付与するにふさわしいものと認められる。なお、平成11年7月8日に調査委員3名が論文内容とそれに関連する試問を行った結果、合格と認めた。